



No.31

Dec.2008



■ 完成近づく第一次大極殿

平成10年からおこなわれてきた第一次大極殿の復原工事もいよいよ大詰めとなってまいりました。現状では二重目の組立工事もほぼ終了し、屋根には瓦が葺き上げられ、大棟の両端には金色の鶴尾が据えられています。これら鶴尾や瓦をいかにして復原するかについては、長期間にわたる議論・検討や試作を経てきました。

瓦に関しては、実際の出土資料を元にして、どのような文様の瓦を、どのような寸法で、そしてどのように葺くのか、様々な要素を細部にいたるまで検討することが必要でした。例えば、大極殿の屋根には10万枚もの瓦を葺いていますが、瓦を葺く間隔が2~3mm異なるだけで、必要とする瓦が千枚単位で変わってきます。

瓦そのものに関しては、可能な限り出土瓦に近づける努力がなされました。今回作られた復原瓦の最大の特徴は、その色調にあります。実際に出土資料を見ますと、大極殿の瓦は他の地点から出土した瓦に比べて、明らかに黒く焼かれていることがわかりました。そこで、理化学的手法によってその「黒さ」を客観的に測定し、様々な試作を重ねながら、出土瓦の「黒さ」に近づけていきました。その結果、復原された大極殿は重厚な雰囲気の屋根をもつことになりました。

鶴尾に関しては、平城宮から出土例がないことから、あらゆる意味で一から復原案を考えなければなりませんでした。材質に関しては、出土例がないことと、文献で西大寺などに金銅製の鶴尾の存在が記されていることから、瓦製ではなく金属製にしました。その大きさや寸法については、唐招提寺など古代の鶴尾を参考にしつつ、大極殿の建物の大きさに応じた寸法を採用しました。結果として、高さ2m近い非常に大型の鶴尾となりました。

今後、残されている作業としては、初重の土壁に関する左官工事と、その壁に四神を描く彩色作業があります。そして来年度、1年がかりで長年大極殿を取り巻いてきた素屋根の解体工事がおこなわれます。年間を通じて、徐々に大極殿が姿を現していくのです。

そして遷都1300年を迎える2010年には、完成された大極殿が一般に公開されます。その折には、重厚な屋根に燐然と輝く鶴尾の輝きを、ぜひともご覧にいらしてください。（都城発掘調査部 林 正憲）



燐然と輝く金色の鶴尾

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第153次）

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、藤原宮朝堂院朝庭の調査をおこなっています。調査は4月から継続しており、6月末の時点で、①朝庭は礫敷きの広場であり排水のための暗渠が設置されていたこと、②儀式の際の旗竿が立てられていたことが明らかになっていました。7月以降は藤原宮の造営過程を明らかにする目的で、礫敷きを部分的に取り外し、下層遺構の調査をおこないました。検出した下層遺構は、運河、斜行溝、南北溝などです。

藤原宮造営時の運河は、幅4m、深さ2mで、長さ7m分を調査しました。運河には、かなりの水量があったことを示す砂が大量に堆積しており、この砂層からは、土器や瓦の他に牛・馬・犬などの骨が多く出土しています。また、運河を埋め立てる際に大量の瓦が捨てられていました（写真左下）。

この運河は、藤原宮造営のための木材や瓦などの資材を運ぶために掘られたと考えられています。「万葉集」の中には藤原宮造営のための木材を近江の田上山から宇治川・木津川を通って運んだという歌がありますが、田上山からの木材もこの運河を使って運ばれたのではないかでしょうか。

今回の調査ではさらに、運河から枝分かれする溝を新たに検出しました。この溝は、運河から枝分かれして15mほどでぶつかりと途切れてしまいます。運河を通て運ばれてきた資材を陸揚げするための支線の可能性が考えられます。

また、運河や枝分かれする溝を埋めた後に、新たに斜行溝が掘られています。斜行溝は、幅1.8m、



運河埋め立て時に捨てられた大量の瓦

深さ0.7mで、調査区の中央で南から北へ流れているものが北東方向へ曲がります。これは、調査区のすぐ北に位置する大極殿院南門を避けるように掘られており、大極殿院南門の建設が進んでいる段階の溝と考えられます。この他にも、大極殿院南門造営時の排水溝と見られる南北溝を検出しました。

今回の調査を通じて、藤原宮中枢部の造営開始から完成、儀式の場としての利用に至るまでの具体的な過程が分かってきました。

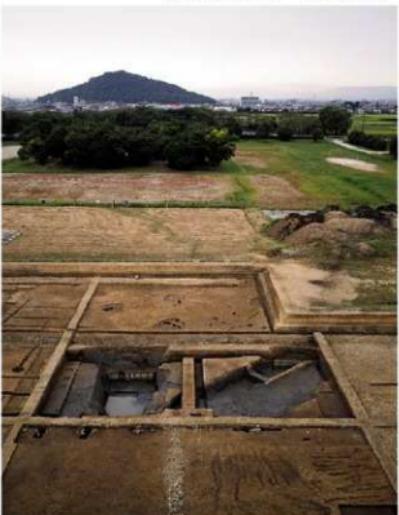
それは、①運河や枝分かれする溝を掘り、造営資材を運び込む、②運河を埋め、大極殿院南門周辺の造成をおこない、斜行溝や南北溝を掘る、③大極殿院南門が完成し、暗渠を備えた礫敷き広場を造る、そして、④藤原宮期に儀式用の旗竿を設置し宫廷儀礼の場として使用する、という各段階です。

藤原宮中枢部の建物建設と周辺の造成工事との関係が遺構変遷の形で明らかになってきたことが、今回の調査の大きな成果です。

なお、9月27日の現地説明会には、約950人の方々に参加いただき、藤原宮の発掘調査に対する期待の高さを感じることができました。

来年以降も藤原宮朝堂院朝庭の調査を継続していく予定です。今後の調査成果に大いにご期待下さい！

（都城発掘調査部 小田 裕樹）



第153次調査区と大極殿、耳成山（南から）

平城宮第一次大極殿院西面回廊の調査

(平城第432・436・437次)

今年度、都城発掘調査部平城地区では、第一次大極殿院の区画施設である築地回廊の調査を集中的におこなっています。第一次大極殿院は大極殿を中心とする施設で、周囲を築地回廊で囲まれた空間でした。その範囲は南北318m、東西178mにも及びます。ここ大極殿院では、天皇の即位や元日朝賀など国家の重要な儀式がおこなわれていました。

西面築地回廊の調査は5月から開始し、南から順番に432次(936m²)、436次(880m²)、437次(390m²)、438次(550m²)と進めています。そして、すでに調査が終了あるいは終盤を迎えた前3者について、簡単に調査成果を解説したいと思います(写真左下)。

もっとも大きな調査成果のひとつに、築地回廊の東側の雨落溝を良好な状態で確認できたことがあげられます。雨落溝は回廊の屋根からの雨垂れを受ける溝のことで、ここでは溝の中に丸い石を詰めた状態が確認されました。この雨落溝は複数回改修されており、その都度石の大きさを変えるなどの違いが良くわかり、改修の様子が明らかとなりました。なお、雨落溝は本来ならば回廊の西側にもあったはずなのですが、西側の雨落溝は後世の削平によって完



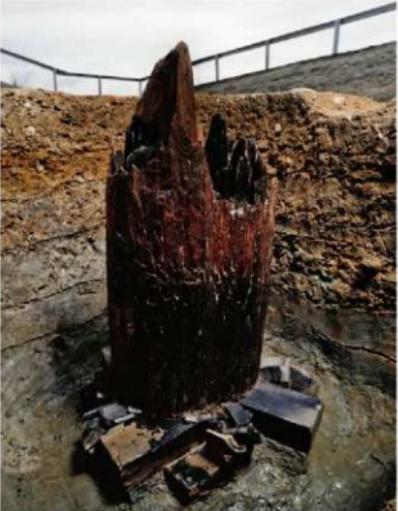
発掘調査区と第一次大極殿(南西から)

全に失われていました。

もうひとつ面白い調査成果として、掘立柱塙が注目できます。恭仁京遷都(740年)の際、第一次大極殿は恭仁京へ移築されます。その時、平城宮では東面・西面築地回廊を掘立柱塙につくりかえます。今回の調査ではその塙の柱穴を多数確認しており、さらにそのうちの4基の柱穴には当時使われていた柱の根元部分がそのまま残っていました(写真右下)。柱の直径は太いもので48cmほどあり、コウヤマキという腐りにくい樹木を選んで使っていました。また、柱根の下には現代のレンガにあたる磚を敷いて、柱の沈下を防ぐ工夫が見られました。これらの磚の置き方は実にさまざまで、一段積みが多いなかで二段に積んだり、磚の下に瓦を敷いたり、と当時の人々の独自の工夫や性格が読み取れるかのようです。

去る9月28日には現地説明会を開催し、発掘調査現場を見学していただきました。当日は天候にも恵まれ、728人の方々に参加いただき、平城宮中心部の遺構や遺物を間近に見ていただきました。西面回廊の発掘調査は現在も継続していますが、終了後には平城宮跡資料館にて速報展を企画しており、皆様のご来館をお待ちしております。

(都城発掘調査部 和田 一之輔)



掘立柱塙の柱穴に残る柱根(北西から)

小さくても活躍します

平城宮・京を発掘していますと、時折このような小さい瓦が出土します。一般的な瓦からすると、ひと回り以上小さいサイズです。朱雀門に使われていた瓦と比較すると、その差は一目瞭然です（写真背景）。このような瓦はどのようにして使われていたのでしょうか。

実はこれらの瓦は、「瓦葺建物」には使われない変わり種なのです。平城宮・京には檜皮葺きの建物も存在していたことがわかっていますが、その屋根の棟だけには瓦が用いられています。そして、棟の中でも「甍様」と呼ばれる特殊な棟の飾りとして、これら小型の瓦が用いられているのです。同じ檜皮葺建物でも、「甍様」が用いられるのはやや格式の高い建物であるため、内裏地区や東院地区からの出土例が目立ちます。

小さい瓦とはいえ、実は高貴のシンボルでもあるのです。（写真はいずれもほぼ実寸）

（都城発掘調査部 林 正憲）



朱雀門に使われた瓦



セネガルの4000年にわたる貝塚群

2008年4月8日から12日まで、アフリカ最西端、セネガルのダカール市で開催された世界貝塚ワークショップに参加し、現地の貝塚を踏査する機会に恵まれました。ここで紹介するのは、ダカールの南部に広がるサロームデルタの約4000年前から現代まで営々と築かれてきた貝塚群です。

マングローブ林に覆われた湿地帯には、いたる所に貝塚が残り、ダカール大学が発掘した最古の貝塚は、放射性炭素年代法で4100年前に遡り、貝層の厚さは3~4m以上、広さは見当も付かないほど大規模でした。不思議なことに貝層の断面には、縄文貝塚のように薄い貝層が堆積した特徴は見られず、厚い純貝層が上から下まで続くだけで、遺物もほとんど見られませんでした。

その後、小舟で現代の貝塚を伴う村を訪問しました。その村はマングローブ林を切り開いた小さな入り江にあり、見渡す限り貝殻が塚（小山）となって白く輝いていました。村に上陸すると、乳児を抱いた若い母親が、貝を剥いたり干したりしていました（図2）。セネガルは旧フランス植民地だったので、フランス語以外の言葉が通じなくて残念でしたが、干し貝の生産を見ることができ、興奮しました。当日の気温は39℃まで上昇ましたが、女性らは日陰で剥き身作業を、炎天下で貝を干していました。カキは生のままで干し、その他の貝は海水を満たした鉄製の大鍋で長時間煮立てて（図3）、むき身を敷物の上で陽なたで干していました。その身を口にし



図1：セネガルとサロームデルタの位置



図2：カキをむく女性

たところ、塩辛いのに驚きました。縄文貝塚が干し貝生産工場だったという説があるのですが、明確な証拠はありませんでした。それに縄文後期に関東地方で製塙土器が出現するまで、圆形の塩が入手できなかったので、高温多湿な日本では干し貝の生産は難しかったのでは、とも思われていました。しかしこれを見て、縄文人も海水の塩分で貝や魚の干物を生産し、内陸部の人々と交易していたのだろうと思いました。

帰国の前日、ダカールの市場で干し貝を購入して持ち帰り、奈文研で味見しました。皆、その発酵とも腐敗とも言えない強烈な臭いと塩味の強さに驚かされました。

百聞は一見にしかず、とは良く聞く言葉ですが、現代の貝塚を見たことで、縄文貝塚も今の日本人の常識でしか理解していないかったことを思い知らされ、目から鱗が落ちる気がしました。この機会を今後の貝塚研究に、生かしていきたいと思っています。

（埋蔵文化財センター 松井 章）



図3：貝を煮る炉と鍋 見渡す限り貝塚が続く

遼寧省隋唐墓出土品秋の調査

遼寧省文物考古研究所との共同研究では、2006年度から遼寧省の隋唐墓出土副葬遺物の調査・整理・研究をおこなっています。この秋は、10月11日から25日まで瀋陽市の遼寧省文物考古研究所で調査しました。今回は遺物の実見・熟観と調書作成・撮影・実測・3次元測定などの考古学的調査に加え、理化学的分析調査を実施しました。調査には、所外の研究者も含めて計8名参加しました。

調査の対象は、遼寧省文物考古研究所などによって朝陽市で発掘調査された、蔡須達墓、織布廠墓、西药廠墓、紡績廠墓、双塔小區墓など14カ所に所在した唐墓の副葬品です。今回は、陶俑、陶器、土器、銅製品、鉄製品、土製品などが調査できました。

3次元計測は大型と小型の3Dデジタルを1台ずつ用意し、測定物の大きさに合わせて使い分け、並行して実施しました。そのため、かなり効率良く作業を進めることができました。

理化学的分析は、蛍光X線分析と顕微鏡による微細な観察・撮影をおこないました。蛍光X線分析装置は携帯式のものを用い、顕微鏡も小型の持ち運びに便利なものを使用しました。携帯式蛍光X線分析装置は、今年6月に天理参考館所蔵陶俑の調査で試験的に使用した結果、十分実用可能なことが確かめられ、今回、本格的に運用しました。蔡須達墓出土の武士俑、文吏俑、駱駝俑などの顔料などを分析し、分析結果は現在、整理・解析中です。天理参考館所蔵資料との比較検討が楽しみなところです。

11月には、遼寧省文物考古研究所などの方々6名を奈良にお招きし、李新全副所長には朝陽市の隋唐墓について講演していただきました。来年3月にも再度瀋陽での副葬品調査を予定しています。

(企画調整部 小池伸彦)



携帯式蛍光X線分析装置での調査

飛鳥資料館のみどころ（15）

前庭

こここのところ、展覧会のお知らせが続いているので、久方ぶりに当館のみどころを紹介いたします。

正面ゲートを入ると、資料館の建物の手前に緩やかに傾斜する芝生張りの前庭が広がっています。その真ん中にそびえ立ち、ひときわ目を引くのは、復原された須弥山石です。当館内に展示しています石神遺跡から出土した実物は3石です。それをよくみると、下段の石と中段の石の表面に彫刻された模様が合いません。本来は、両者の間に、もう1石あったのです。そこで、前庭のものは、4石で推定復原し、実際に水を噴出させています。

これとは別に、飛鳥の謎の石造物でもある岡の酒船石・車石、出水の酒船石が、古代の流水施設をイメージして設置されています。このうち、出水の酒船石は、発掘調査により、飛鳥京菟池の流水施設であることがわかりました。また、車石の

一部は、明日香村内から移設された実物です。

さらに、これらを囲むように、周囲にはイチョウ、カキ、サクラ、スモモ、カエデ、コナラ、ケヤキなどが植えられ、四季のうつりかわりを楽しめてくれます。なお、当館の元館長である坪井清足によれば、前庭のケヤキ（楓）は、飛鳥寺の西にあってさまざまなできごとの舞台になった「楓の木の広場」をイメージして植樹した、とのことです。

（飛鳥資料館 加藤 真二）



青空コンサートにも利用しています

■ 記録

埋蔵文化財担当者研修

○鉄製武器類調査課程	
平成20年10月6日～10日	13名
○遺跡測量課程	
平成20年10月20日～30日	5名
○遺跡地図情報課程	
平成20年11月18日～21日	15名
○自然科学的年代決定法課程	
平成20年12月1日～18日	6名

現地説明会

○飛鳥藤原第153次（藤原宮朝堂院朝庭）	
平成20年9月27日（土）	953名
○平城第432次（第一次大極殿院西廻廊）	
平成20年9月28日（日）	728名

公開講演会（第103回）

平成20年10月25日（土）	
於：平城宮跡資料館講堂	
「平城宮とその周辺の先史時代」	
森川 実 都城発掘調査部研究員	

洋風庭園と日本近代」

栗野 隆 文化遺産部研究員

平城宮跡資料館展示

特別企画展「地下の正倉院展－長屋王家木簡の世界－」

平成20年10月21日（火）～11月30日（日）

○ギャラリートーク

平成20年10月26日（日） 山本 崇

平成20年11月9日（日） 浅野 啓介

平成20年11月23日（日） 渡辺 晃宏

飛鳥資料館秋期特別展

展示「まほろしの唐代精華 黃治唐三彩窯の考古新発見」

平成20年10月17日（金）～12月7日（日）

○シンポジウム「河南黄治唐三彩窯の考古新発見」

平成20年10月18日（土）

於：平城宮跡資料館

孫 新民 河南省文物考古研究所長

郭 木森 河南省文物考古研究所館員

劉 蘭華 中国文化遺産研究院研究員

巽 淳一郎 京都橘大学教授

最近の本—所員の著作から

○山崎信二「近世瓦の研究」同成社、2008年8月

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2008年12月